

最初に訪れたのは、明治三十七年九月二十九日です。この時の書簡に、「(北遊第二信)昨夜、更け行く燈に、心は冴えくぐて、まどろむ事僅かに一時間半。起き出づれば、暁近き庭面せの猶月色を浴びて氷れるが如きに、つくぐくとひとり、旅の哀れを感じつゝ、朝餉もそこくぐにすまし、四時四十分尻内を発しぬ。忘れがたきは、牧牛眠る草原を隔てゝ、淡霧罩めし下河原湖上の暁光なり。途次野辺地駅に下りて、秋濤白鷗を泛ぶるの浜辺に、咲き残る浜茄子の紅の花を摘みつゝ、逍遙する事四時間。正午少しずぐる頃再び車中の人となりて二時青森に入りぬ、あゝ海！海、恋しきは海なるかな、幾年のわかれをもうらまずして彼女は今、其不休の動揺に、其無限の静寂に、深くもく我をば慰めもし、また教へもしつゝあるなり。九月二十九日午後九時 青森市にて 啄木 前田林外様」とあり、また(略)第一夜は尻内の旅舎に疇を定めて朽欄に凭る惆悵の旅鳥、梅の落葉と共に鋭くもさし来る十九夜許りの月光に、人恋ふ胸を照らさせて、先づくこの度の旅日記の第一頁に云ひ尽し難き一陣の悲風を紅の涙と点じ、翌日は未だ明けはなれぬ朝まだきに車中に入り下河原湖上の秋暁に無限の詩歌を貪り、三四時間野辺地が浜に下車して、咲き残る浜茄子の花を摘み、赤きその実を漁童

と味わひなどして再び車便一駆青森に着、その夜そこに冷たき夢を結び申候。(略)三十七年十月十一日 北海小樽にて 啄木 翠淵大兄 侍史」とあることから、この和歌は明治三十七年に、野辺地で途中下車したときの情景を思い浮かべて詠じたのではないかという推定が成り立ちます。

公園の頂上に登ると、旧制野辺地女学校の先生で、中央の民俗学会にその名を知られた中市謙三(絶壁)の句碑が 満天星などの小灌木に囲まれ、身を隠すようにして建っています。

この句碑は昭和四十七年(一九七二)に建てられました。句碑には

傘さげて
み堂をめぐる
夕嵐

と刻まれています。

中市謙三は野辺地の歴史を研究し、『野辺地町郷土史資料集』の編纂に参画するなど、多くの業績をあげました。彼について、その生涯を描いた作品には、高松鉄嗣郎の『文人中市謙三の生涯』があります。

中市謙三 句碑

